

『時が来ました』 (ヨハネの福音書 12章 20-26節) 202.1.7.

<はじめに> 暦が改まり、心も新たに踏み出そうと決意を新たにする時です。そこに吹く風は強い風でしょうか、向い風でしょうか。鳥は飛び立つために風を見ていると聞きます。私たちは何を求めているでしょう。イエスはこの箇所です「時が来ました」と言われます。何を求めているのでしょうか。

I イエスにお目にかかりたい(20-22)

①祭りの群衆

この祭りは過越の祭り(1)で、場所はエルサレム(12)です。イエスは大勢の群衆に歓迎されて入京されました(12-19)。その礼拝者の中には改宗者のギリシア人も数名いました(20)。彼らはピリポにイエスへの面会を願い、ピリポはアンデレとともにイエスに取り次ぎます。

②なぜそこにいるのか

祭りの群衆と言っても、その心は個々様々です。律法の義務だから、毎年の恒例行事として集う者は少なくないでしょう。イエスの奇跡を見て興奮して、あるいは奇跡を見たいと思ってついて来た者もいたでしょう。私たちは今日どうして礼拝に集っているのでしょうか。

③イエスに会うために

自分とは違う何かに魅力や輝きを感じて、人は接近します。ギリシア人巡礼者は、イエスに会うことを願いました。イエスと語り、問い掛けて聞き、その心と生き方をより深く知り、自らを神のみことと計画にふさわしく整えるために、私達もイエスに近づきます。

II 栄光を受ける時(23-24)

①一粒の麦

ピリポたちの取り次ぎにイエスは答えたのでしょうか。なぜイエスはここで「時が来ました」と言われたのでしょうか。そして「一粒の麦」で知られる句(24)を語られます。それはイエス自身がこれから間もなくこのエルサレムで遂げようとされている十字架と復活を暗示しています。

②二種類の「時」

暦・時刻など定まった時の流れに沿って、私たちは生活しています。客観的で万人共通の「時」です。イエスが「時が来ました」(24)と言われたのはそれではなく、タイミング・機会を示す主観的な「時」です。イエスはこの「時」を意識されています(2:4, 8:20, 13:1)。

③「時」に気付く

ギリシア人がイエスに面会を願ったことが、イエスにとって「時」に気付く引き金でした。ユダヤ人だけでなくすべての人々がイエスと出会い、神に近づくためにイエスは遣わされたのです。その実現は十字架と復活です。いよいよその時が来たことを察知されました。

III わたしについて来なさい(25-26)

①いのちの不可思議(24-25)

いのちは何よりも大切なものです。いのちは各自のものですが、自分のために確保するだけでなく、次に繋ぐために用いるものです。一粒の麦の例はそれを見事に表しています。また、この世でのいのちの限界を認める先に、永遠のいのちを見出すことができます。

②イエスの生き方(24)

イエスは自ら一粒の麦になる時が来ていることを自覚されています。すべての人の罪を一身に担って十字架に架かれる道です。自分のいのちをそれに投じることは重たい決意と覚悟を伴います。しかし彼の死によって、多くの人に永遠のいのちがもたらされます。

③わたしに仕えるなら(26)

イエスを取り巻き近づく人は大勢います。イエスに仕えたい、と思う人もいます。イエスは自分の周囲を見渡して「わたしについて来なさい」と言われます。自分中心ではなく、自分と自分の大切なものをイエス中心にして生きる決意と覚悟が私達にあるのでしょうか。

<おわりに> いのちに関わる重大な決断だからこそ、慎重に確実にしたくなります。しかし、私達は時の流れに抗うこともできない限りある者です。ならば、いのちの不可思議を熟知しておられ、その機会を的確に掴んで歩まれるイエスに信頼し、仕えようではありませんか。(H.M.)